

「握手」における語りと主題

松 本 修

プロローグ

「握手」¹について次のように論じたことがある。(松本 1998 : 66)

この物語は、心と心の結びつきが、言語的な記号の共有によって支えられ、精神の伝承がそうした記号の受け継ぎに支えられているというモチーフによって、心とことばの関係を考える契機を与えてくれる。ちょっといい話としてルロイ修道士のやさしさを読みとり、道徳的な心の教育に短絡させられてしまうことをおそれる。

その代わりとして提案したのが、指文字と、人差し指を交差させて打ち付けるしぐさとの質的な相違を問題にし、握手や天使園での「天使の十戒」とも構造的に関連する記号解釈というモチーフを精神の伝承というテーマに結びつけて読むという方向性であった。しかし、指文字をどう整理するかとか、指のしぐさと握手とをどう関連させるかということは、基本的には読み手の解釈に属することがらである。人差し指のしぐさを一連の指文字と解釈する読み手と、別物であると解釈する読み手には明らかな読みの違いがある。この違いがどのようなテキストの文脈へのアプローチからもたらされるのか、読みのプロセスに着目して説明できなければ、提案した読みの方向性もしょせんは一つの解釈の提示に過ぎない。文学テキストの読みの学習においては、互いに異なる読みを媒介することが重要になるという立場から、その媒介の可能性について〈語り〉の側面から考えてみたい。

語りのマクロ構造

「握手」の語りのマクロ構造は、冒頭部分ではほぼ把握できる。冒頭部分は次のようになっている。

- ①上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。
- ②桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があって、その上動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。
- ③いすから立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、

*1 井上ひさし「握手」は、『IN・POCKET』1984.5 初出 『ナイン』講談社 1987 所収 『ナイン』講談社文庫 1990 所収 平成15年版中学校国語科用教科書では、光村図書『国語3』学校図書『中学校国語3』に収載されている。引用は学校図書『中学校国語3』によった。

「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こっちへ寄ってきた。(中略)

④ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。⑤その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子どもたちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。⑥中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの「べからず集」があった。

①③④の「やって来た」「寄ってきた」「差し出してきた」という方向性を持つ動詞(補助動詞)表現、②の「ている」という継続相の表現、③の「こっち」というダイクシス、などにより、語り手が物語場面に臨在しないし存在していることが示されている。そして、③⑤に省略されている主語として想定される一人称が⑥に「わたしは」という提題主語として現れることで、語り手「わたし」が物語の作中人物でもあるということが明らかになる。一人称限定視点の語りによっていることが明らかになる。ただ、回想場面があるために、一人称の語り手は複数の時間を動くことになる。そして、テキスト末尾近くでは、「上野公園の葉桜が終わるころ、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。」とあって、最終的な語りの現在は、物語の場面としての上野の西洋料理店での対話からさらに一年以上あとであることになっている。このような複数の時間が交錯しながら描かれることで、語り手「わたし」は幾つかの相を持つことになる。

人稱構造と時間

語り手「わたし」は幾つかの物語の時間を行き来するものの、安定した一人称となっている。しかし、主人公ともいべきルロイ修道士に対しては幾つかの呼び名が用いられている。先の引用部分では、①③④⑥で「ルロイ修道士」と呼ばれており、省略した中間部分では、「…それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には年季が入っている。」として代名詞「彼」が用いられている。テキスト中でのルロイ修道士の呼称は次のように7種類ある。

- a 朝晩の食事は静かに食うべからず。(ルロイ先生は、園児がにぎやかに食事をして
いるのを見るのが好きだから)
- b それから、このケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童
たちの近況を熱心に語り始めた。
- c ルロイ修道士はオムレツの皿をのぞき込むようにしながら、両のてのひらを擦り合
わせる。
- d だが、彼のてのひらはもうぎちぎちとは鳴らない。
- e 「先生の左の人差し指は、相変わらず不思議なかつこうをしていますね。」
- f 「ルロイ先生はひと月間、わたしたちに口をきいてくれませんでした。…
- g 元園長は何かの病にかかりこの世のいとまごいにこうやってかつての園児を訪ねて
歩いているのではないか。

aは、天使園で子どもたちにささやかれていた「天使の十戒」のことばであるから、子どもの立場からのことばなので、「ルロイ先生」となっている。bは、作中人物を説明する語りの場からの語り手の説明としてそう呼ばれているものであろう。cは、ニュートラルな三人称の呼称であり、その言い換えであるdの彼とともに、もつとも多い。e fはともに会話の中での「わたし」からの二人称として用いられている。gは、再会の場面での作中人物「わたし」の心中思惟の中のことばであり、「かつての園児」に対応する役割を示すものとして用いられている。こうしてみると、「ルロイ先生」という呼称が、回想される出来事当時の園児、あるいは西洋料理店での物語の現在の元園児というような立場から発されており、特に前者は、物語の時間構造にかかわっていることがわかる。次のような部分にその転換が典型的にあらわれている。

①戦争が終わるまでルロイ修道士たちはここで荒地を開墾し、みかんと足柄茶を作らされた。②そこまではいいのだが、カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、ルロイ修道士が代表となって監督官に、「日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは他の曜日にきつとする。」と申し入れた。③すると監督官は、「大日本帝国の七曜表は月火水木金金。この国には土曜も日曜もありやせんのだ。」としっかりつけ、見せしめにルロイ修道士の左の人差し指を木づちで思い切りたたきつぶしたのだ。④だから気をつけろ。⑤ルロイ先生はいい人には違いないが、心の底では日本人を憎んでいる。⑥いつかは爆発するぞ。⑦……しかしルロイ先生はいつまでたっても優しくかった。⑧そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている。⑨これはどういうことだろう。

①から③までは語りの場における超越的な語り手が解説をしている形であり、「ルロイ修道士」というニュートラルな三人称が用いられている。①文の「ここ」という指示語も、文脈指示と判断され、捕虜となっている物語の場面に即したダイクシスではないと思われる。それは、②文の「そこまではいいのだが」という解説的な表現にもあらわれている。ただし、この部分は園児たちの間でささやかれていた既成の説話的物語の引用であるとも言える。④から⑥は、一文の短さ、「気をつけろ」という命令形や終助詞「ぞ」、非タ系列の文末表現、「憎んでいる」という継続相の表現に口頭語的表現などに見られるように、回想されている天使園での出来事の場面における園児たちのことばをそのまま反映した形であり、明確な引用表示はないものの、発言をそのまま提示している自由直接表現と判断される。⑦はリーダー「……」によって、④～⑥との位相の違いが示されており、⑥までの部分の引用表示として機能している側面もある。また⑦はタ系列の文末表現によって位相の転換があらわれている。しかし、⑧は継続相の文末となっており、⑨も非タ系列である。しかも⑨は思考内容が表現されていて、「これは」という指示語も文脈指示というよりは、⑧文の内容を直接指示している表現としての性格が強い。つまり、⑦から⑨は天使園での出来事、物語場面における作中人物「わたし」の心中思惟がそのまま提示されている自由直接表現としての様相を帯びている。むろん、タ系列やリーダーという標識を重く見て、⑦を独立して語りの場における語り手の解説とみることも、様々な標識にもかかわ

らず、⑦から⑨全体を語りの場における語り手の説明とみることも可能である。そして④文以降の自由直接表現としての様相を帯びた部分では、「ルロイ先生」という呼称が用いられており、作中人物としての園児、「わたし」あるいは語りにおける「わたし」の立場からの表現であることがあらわれている。そしてまた、それに連動する形で、入れ子状の物語内容の時間と物語言説の時間が交錯する構造になっている。織田保夫（2001：106-107）は次のようにこのテキストの時間構造を指摘している。

ここには〈天使園にいた頃〉〈上野での再会の時〉〈葬式の時〉〈まもなく一周忌になろうとする時〉という四つの時間があり、第四の時間が執筆の現在である。ここから三つの回想が作品の時間を形成しているわけだ。

「執筆の現在」というと生身の作者に近づくが、物語言説の語りの現在とみてよいだろう。先の引用部分には〈天使園にいた頃〉〈上野での再会の時〉〈物語言説の語りの現在〉の三つの時間がかかわっている。超越的な語り手のことばは必ずしも織田の言う執筆の現在に繫留されるものではないが、語りにおける現在はテキスト上では〈まもなく一周忌になろうとする時〉とされていることは確かである。引用部分の⑦あるいは⑦から⑨を、①～③同様、語りにおける語り手のことばと見るか、天使園にいた頃の作中人物「わたし」のことばと見るかによって、読みは異なることになる。それは時間構造の把握そのものにも違いを与え、「わたし」の行動をどの程度相対化して見るかという点においても違いをもたらす。そのことが主題の把握に一定の影響を与える可能性がある。

語りにおける現在と指言葉

織田（2001：100）はこのテキストに繰り返し現れる指言葉について、次のように述べている。

「わたし」がルロイ修道士の指の動きを見るたびに「思い出した」ものは天使園での共同生活の日々である。かつてのある時の状況の細部や心情の陰影をも含めた総体が、具象的な指の動きを見ることによって一瞬のうちに復帰し現前するのだ。「わたし」の過去は指ことばの象徴作用のうちにある。

青嶋康文（2001）も同様にカットバックの切り替え装置としての役割を指摘しており、要するに指言葉が特別な象徴作用を持ったものであることを指摘している。この象徴作用は、ルロイ修道士の指言葉が、単なる固定的なコードに結びつけられるサインであるばかりでなく、子どもたちとの心の交流を通して再び生まれ変わる記号となっているからであり、いわば意味作用の原初的な発現となっているからであろう。そして、そのようなものとして指言葉があるとき、織田や青嶋が一連の指言葉に位置づけている「両手の人差し指を交差させて打ちつけるしぐさ」が他の指言葉からは突出していることがわかる。松本（1998：64-65）では、「他の指文字とは違って、無意識的、無自覚的なものであった」「人差し指を打ちつけるという行動は、抑えがたい激しい感情を持ったときに、無自覚的無意

識的に現れてしまう癖だった」としたが、そのことを部分テキストに即してもう一度考えてみる必要がある。

①ルロイ修道士の、両手の人差し指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。②これは危険信号だった。③この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。④そして次にはきつと平手打ちが飛ぶ。⑤ルロイ修道士の平手打ちは痛かった。

①③⑤でルロイ修道士というニュートラルな三人称が用いられ、②⑤でタ系列の文末表現がとられており、基本的には上野での再会場面における作中人物「わたし」か語り手「わたし」の立場からの表現となっている。しかし、①で「脳裏に浮かぶ」というその浮かんだ内容は少年時代の「わたし」の経験である。ニュートラルな呼称やタ系列の文末にもかかわらず、「脳裏に浮かぶ」が一種の引用表示となって、②③④を少年「わたし」の立場からの表現と見ることも可能である。とりわけ④文は、これだけを独立して少年「わたし」の自由直接表現と見ることも可能であろう。しかも、この部分の直前は次のような会話となっており、「ぶたれた」という受身形が作中人物「わたし」それもぶたれた少年時代の「わたし」を想起させる構造となっている。

「それよりも、わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか。もし、していたなら、謝りたい。」

「一度だけ、ぶたれました。」

読み手は、再会場面の「わたし」や語り手「わたし」に寄り添う場合、ルロイ修道士のこのしぐさを、少年「わたし」の「おまえは悪い子だ」というコード化を相対化して読むことができる。しかし、少年「わたし」に寄り添う場合には、その相対化がし難くなるかもしれない。描出表現の様相を持つ部分テキストをどう捉えるかによって、解釈の相違が現れる可能性がある。

内容的に見ても、再会場面における「わたし」、語り手「わたし」は「おまえは悪い子だ」とルロイ修道士がどなっていたのだなどとは考えていないはずである。これが無意識の行動であることを今の「わたし」は知っている。ただ子どもである園児たちがそのように短絡的にコード化しただけだ。むしろ、ルロイ修道士は、「ルロイ修道士は改めて両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつける。ただしあのころと違って、顔は笑っていた。」とあるように、このしぐさを後には自覚はしていたと思われる。しかしそれが「あのころ」実際に現れてしまったのは無意識のものであった。

そしてこのしぐさは無意識の裡に発露するものとしてそのまま「わたし」に受け継がれている。

上野公園の葉桜が終わるころ、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。間もなく一周忌である。わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。葬式でそのことを聞いた時、わたしは知らぬ間に、両手

の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

この無意識の行動を織田（2001：108）は「不条理への憤慨を神に訴えている」ものだとしている。もともとこのしぐさには、否定、禁止、自己抑制、自己打擲などさまざま意味を読みとることが可能だし、そもそも葬儀の場面での「わたし」の感情は未分化なものである。そうでなければこのしぐさは現れないであろう。織田は、「間もなく一周忌である。」という語りの現在を示す一文が葬式の場面の回想より前に置かれていることに着目し、「わたし」の憤りの現在性を強調している。しかし、そもそもこの指言葉が憤りを示すとすることそのものが一つの解釈である。このしぐさが現れる三つの部分テキストをどう読むか、再検討が必要なのではないかと思われる。

「握手」の主題

すでに見てきたように、「握手」には入れ子状に回想の時間が組み込まれており、そうした時間構造が、部分テキストを、天使園時代の物語内容の時間の作中人物「わたし」、上野での再会場面の物語内容の時間の作中人物「わたし」、葬式の場面における作中人物「わたし」、物語言説の語りの現在における語り手「わたし」、さらに超越的な立場の「わたし」というような一連の「わたし」のどの位相に属する表現とみなすかによって読みが異なるという結果をもたらしている。たとえば、織田の解釈は、天使園時代の「わたし」のコード化がある程度そのまま語りの現在における語り手「わたし」にも生きていると考えるところから生まれているであろう。「語り手」像を重ね合わせ、少年「わたし」を語り手「わたし」に近づけた上でそこに寄り添っている読み手像が浮かぶ。織田の言う「ルロイ修道士への信仰告白」という主題はそうした読みのプロセスから生まれているものと思われる。しかし、「語り手」像を分離し、どれかの「わたし」にもつばら寄り添うことも可能である。松本（1998）では「精神の伝承の物語」という主題を導いたが、これはより語り手を分離し、作中人物を相対化したところにある読みである。

冒頭に示したように、テキスト構造や部分テキストに対する精緻なアプローチを欠いたまま「ルロイ修道士のやさしさ」などという主題を導くのは読み以前の問題であるが、精緻なアプローチを実践するとき、まさに読みのプロセスの違いや、それをもたらす読みの戦略の違いがクローズアップされることになる。こうした読み手相互の読みの違いを意識化し、その違いの拠ってくるところを互いに理解していくことこそ、文学テキストを読むということだと考える。

文献

- 青嶋康文 2001 「喪失と継承——井上ひさし『握手』を読む」 田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力中学校編3年』2001 教育出版
- 織田保夫 2001 『『握手』の構造』 田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力中学校編3年』2001 教育出版

- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 松本修 1998 「「握手」小論—精神の伝承の物語」『Groupe Bricolage 紀要』No.16 Groupe Bricolage
- 松本修 2000 「ナラトロジーの役割—「山月記」を具体例として—」『読書科学』172 日本読書学会
- 松本修 2002a 「「走れメロス」の語り」『宇大国語論究』13号 宇都宮大学国語教育学会
- 松本修 2000b 「ナラトロジーと国語教育学研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書
- 松本修 2002c 「教材研究における語りの分析の方法—「にじのみえる橋」(杉みき子)を例に—」『Groupe Bricolage 紀要』No.20 Groupe Bricolage

(まつもとおさむ 上越教育大学学習臨床講座)